

考えていきたいこと

清水中学校 三年 日高 莉々愛

終戦から七十五年。あの恐ろしい出来事から長い年月が過ぎた今、次の世代へ語り継がなければならぬ私たちは、過去の戦争から何を学び、何を未来へ語り継ぐべきなのだろうか。

戦争が終わり、今日まで「平和」と呼ばれる日々が続いてきた。私たちは、歴史を学び、「戦争は恐ろしいもの」と誰もが思っている。しかし、具体的にどのようなことが起こり、戦争を生き延びた人々が何を思いながら生きてきたのかを、本当に理解している人は少ないだろう。それは年月が経つにつれて、より鮮明さを失い、風化しつつある。太平洋戦争を経験した方々、原爆を経験した方々の平均年齢は、二〇十九年の時点で約八十二歳という結果が出ている。また、その数は今や、当時の四分の一までになったそう。実際に経験したままを語る方が減ってきている今、戦争を経験した方々は、何を思い私たちに何を伝えていきたいと思っているのだろうか。

終戦七十五年という節目を迎えた今年の夏、私はテレビで放送されていた戦争に関する特集や映画を多く目にした。いろいろな視点からまとめられた番組や作品を見ていく中で、最も私の印象に残ったのは、再現された映像ではなく、戦争経験者の皆さんの話だった。何十年も前のことでも、つい最近の出来事のように鮮明に覚えている、涙を浮かべながら話をしていった。それだけ想像を絶する出来事が次々に目の前で起きていたのだろう。私たちの住む地域も鹿児島空襲で大きな被害を受けたそう。ついさっきまでいつものように話していた友人が、一瞬にして誰なのかも見分けがつかないような姿で息を引き取っている。そんな信じることできないことが、事実、この街でも起きたのだ。焼け野原にひっそりとたたずむ桜島の写真からも、なお悲しみや辛さが伝わってくるようだった。

私の学校では、修学旅行で広島を訪問し、原爆ドームや資料館で原爆や戦争について学んだ。私たちに平和を問いかけるように立つ原爆ドームや七十五年前の出来事を静かに物語る遺品の光景は今でも頭の中に残っていて、まるで別世界にきた、そんな感覚になったのを覚えている。そこで出会った語り部の方が話の最後に私たちに微笑みながらこう言った。「今日聞いたことはぜひ家族や友達ともう一度話してみてほしいな。何十年も前の話なのに、聞いてくれてありがとう。」

このとき、私は改めて、戦争は二度と起きてはいけない、忘れてはいけないと思った。

また、被爆者の方々が悲しげに話していたこと、それは差別のことだ。原爆の被害を受けていない人々の近くにいると、「放射線がうつるから来ないで」、やけどやケロイドの痕があると「気持ち悪い」など人間として見られず差別的な言葉をたくさん浴びてきたという。この話を聞いて、胸が苦しくなり、それと同時に、今の日本で起きていることと似ていると感じた。東日本大震災後の被爆の風評がかつて問題になったが、今はコロナウイルスに感染してしまった人への差別などで、有名人だけでなく一般の私たちも誹謗中傷の恐怖を感じる状況がある。そんな心無い言葉に悩んでいる人が増加し、自殺のニュースも相次いでいる。顔が見えないという理由で安易にネット世界に投げ込まれた言葉は、「同じ人間」に対する攻撃へと変わり、命を傷つけることになっている。今こそ、もう一度みんなで「幸せに生きる」ことや人権、平和について考える必要があるのではないか。

戦争体験者の言葉を次の世代へ語り継いでいかなければならない今、まず私たちが一番にすべきことは、戦争について深く学ぶことの前に、「同じ人間を大事にする」という考え方、「人権」についてもっと考えることだと思う。そうすることで、この社会を本当の意味での平和を語れるようにしていきたい。